

湯治を利用した温泉地の活性化

私が生まれ育った大分県日田市には天ヶ瀬温泉という温泉地が存在する。しかし、近年ではコロナウイルスやインバウンド客の減少により客足が遠のいている。大学時代に調べたデータでは旅行客の70%は中国・韓国からのインバウンド客だった。彼らは別府・湯布院へ旅行する中継地として天ヶ瀬温泉へ立ち寄り一泊していた。また、ホテル内ですべての娯楽が楽しめるため街へ繰り出すことはなく、町にお金が落ちることはない。このような状況下の温泉地は全国に多々あり、経営難の旅館は多い。そのため、ブランド化に成功し、観光地化された温泉地と差別化を図るために湯治を使った温泉地を天ヶ瀬温泉に作りたいと思った。

天ヶ瀬温泉は古くから湯治場として「豊後国風土記」等にも登場し、様々な文献で利用されていた過去がある。また、泉質も単純泉と硫黄泉が噴出しており湯治場として問題ない。しかし、客室の作りが旅館と湯治場では異なり、長期滞在型の湯治場には台所等が必要となる。しかし、湯治客が自分で自炊するので地域の農作物を販売することが可能である農産物が潤い、一石二鳥でないだろうか。

温泉地が観光地化し約100年を迎え、成功した場所そうでない場所の差が明確となっている。いまこそ温泉の本来の利用方法を使った温泉地が起爆剤となりうるのではないかと私は考えている。